

明治初期露文学翻訳論攷 (三)

— 重訳に対する二つの態度 —

加藤 百合

一 翻訳者としての森鷗外(1)

(一)

森鷗外の翻訳は、常にアンソロジーのかたちで世に問われた。一冊の本の中に収められる作品は原作者の国も多彩で、寧ろ偏りのないよう鷗外が目配りを効かせていることは『現代小品』『十人十色』『諸国物語』といった、書名にも透けて見える。就中『諸国物語』の目次は国別になっていて、「以上二篇 スカンデナキア」「以上八篇 仏蘭西」「以上三篇 独逸」「以上九篇 奥大利」「以上九篇 露西亜」「以上三篇 亜米利加」という括りがなされ(2)、翻訳者即ち何らかの特定語学の使い手という、現代我々が無意識のうちに持っているイメージをはっきり否定する。森鷗外の翻訳者としての姿勢を考察してみたい。

鷗外の翻訳の底本は基本的に各作品のドイツ語訳であった。(小堀桂一郎氏が東京大学鷗外文庫所蔵の鷗外蔵書を書き込みに至るま

で精査されその出典の多くを明らかにされた。本稿においてはこの結果を参考する。)

：世間と一切の交通を絶つてゐるらしい主人の許に、西洋から書物の小包が来る。(中略)小さいながら財産の全部を保管してゐるZoarの手で、利息の大部分が西洋の某書肆へ送られるのである。(「妄想」)

という自作の主人公のように、鷗外はいわゆる見計らいの形で、ドイツの書肆から新刊の書籍、雑誌を大量に送らせていたという。(「日露戦争から凱旋し、やがて陸軍軍医総監に昇任し、陸軍省医務局長の地位に就いた頃より以降の鷗外が、作家であると同時に一個の驚くべき多読の読書家であり、かつその読書生活は当時としてはかなり贅沢なものであつた」小堀「森鷗外文業解題」)

またドイツから文学新聞を予約購読し続けていたことはよく知られている。小説「魔睡」(明治四十二年)の中にも、一週間分づ

つ纏めて送らせてゐるKölnische Zeitungといふ文句がある。

鵑外には『椋鳥通信』という、断片的にヨーロッパ文壇の動向や文学者のうごき、或いは現実の奇談珍談を日付入りでつたえ、一言二言ごく気楽なコメントを加えた、雑然とした文章群があることは知られていよう。これは『昂』に長期連載（明治四十二年三月一日—大正二年十二月一日。途中三回の休載、全五十五回。）されたものであり一回毎の分量はそう多くはないが合わせると全集にして九一冊（八四二頁）を占める量がある。単行本には収められなかつた。

これが要するにこの種の新聞の文芸欄を片端から訳したものであるらしく、文中に「…に就いていろいろな記事が出る。…」と題した記事から少し抜き出す。」などという鵑外の口吻が稀に現れるほか新聞雑誌の固有名詞（Revue scientifique、Prometheus、Revue des Deux Mondes、Figaro、Muenchener Allgemeine Zeitung、ほか）が現れる箇所もある。またスバル同人の平野萬里以下によりその材源として夙に幾つかの新聞名が推定紹介されている。

ところで彼がかなりの数の短編小説をそうした新聞から訳出しているという事実は注目に値する。例えば『ベルリン日報』（Berliner Tageblatt）には、前記小堀氏によれば日曜文芸付録があり、別冊をなす毎週その付録には多く読切か、又は短期連載の短編小説が載っていたという。新聞というものの性質上、それらは皆新作であるか、或いは外国の作品の場合はドイツ語への新訳である。全集の翻訳解題にあたる限り鵑外はこの新聞の日曜付録の小説（中には少数の戯曲も含む）を前後計十八篇翻訳しており、それが『十人十語』に一篇、『諸国物語』に九篇、『蛙』に四篇採られている。

つまり、海外文壇の最新の消息に最もよく通じた知識人であると

自他ともに任じた鵑外の訳筆が紹介するところは、クラシックではなく、日刊紙に取り上げられるところの、同時代の最も活発にして問題となる文学傾向であつた。鵑外には、西欧の読書界全体が日々自然に呼吸している空気を、遠い、閉ざされた日本にまで吹きこません、我その「窓」たらん、という気概があつた。これはドイツからの帰国以来「普請中」の日本に暮らしてきた鵑外が、明治日本の知識青年のためにまさに「啓蒙」という言葉を体現するところである。

そして翻訳者としての鵑外は言及された文学上の「新」傾向を、とり敢えずは網羅的に次々翻訳紹介していくのである。ロシア文学からの翻訳点数も、日露戦争前後のロシアへの関心の高まりを反映して可成りの点数に上る。「マクシム・ゴルキイ」（明治三十六年）は同通信のうち長いものに属する。またトルストイは『椋鳥通信』連載中である一九一〇年に亡くなつてゐる。世界的な文豪であり殆ど教祖の如く渴仰される実践的思想家であつたトルストイが、田舎の一寒駅で家出の末亡くなつたことは、世の耳目を恃たしめ多くの記事（「通信」中にも実に七十五カ所に名前が挙がつてゐる。）になつた。鵑外は早速トルストイの遺書を訳出している。

鵑外が「即興詩人」を除いては小品ばかり、しかも原作者の代表作とも呼び得ないようなもの（極言すれば原作の、翻訳価値に首を傾げたくなるもの）まで玉石混淆に訳す嫌ひがあり、しかも訳出しておき乍ら、「此篇（玉を懐いて罪あり）のこと—筆者注）の如き、やや我嗜好に遠きものなるを、当時強ひて日刊新聞に訳載せしは…」と後に単行本収録に際し自注したり、「（「黄綬章」は）余りに卑し。某の日刊新聞に始て載すべき小説をと請はれて、強ひて訳し

つるなり。」と『改訂水沫集』に収録する際の序に言ったり、些か無造作すぎる感みが残るのはこうした鴉外の翻訳姿勢に原因すると思われるのである。

英文科出身の坪内逍遙がシェイクスピア翻訳紹介を本懐としたよ
うな、特定の原典にたいする思い入れは鴉外の場合感じられない。

いったいに底本の選択には鴉外は極めて無造作であった。一代の名訳を謳われる『即興詩人』にしてから、扉に「デンマーク語からの自由訳による」(小堀訳)とあつけられかんと書かれた、廉価普及本ともいべきレクラム文庫を底本にしている。翻訳時既に、「原著者自身の校閲を経たる」と明記されたアンデルセン全集(版を重ねていた)を含めドイツ語版の「即興詩人」は八種に上ったにも関わらず、である。『諸国物語』発行の頃には底本としてレクラム文庫を用いることはもはや少なくなっていたというがロシアのコロレンコ『樺太脱獄記』などはレクラム文庫版の独訳を利用している。

(二)

鴉外の翻訳の底本は基本的に各作品のドイツ語訳であった。

しかし鴉外の場合重訳を弱点と考える様子はさらに見られない。

ロシア文学の紹介についても、自分の理解が最も原作の意を伝えるものであると言っている。アンドレーエフの小品「クサカ(犬)」を、好敵手上田敏が仏訳から訳出するや独訳を底本として訳出し、自分の作品集に編み入れた経緯については既にみた(拙稿「明治初期露文学翻訳論攷(二)」『比較文学・比較文化論集』第九卷、一九九五、東京大学)。しかも、ロシア語を解し従って原本にあたる、

ということを武器として『無名通信』子が敏訳をめちやくちやに攻撃した経緯があったにも関わらず、である。

鴉外は大正三年にはいつてから「翻訳に就いて」「亡くなった原稿」(全集二六卷)という一連の小文を書いている。ノルウェー語を解するという評者が、『新日本』誌上で、鴉外と島村抱月が相前後して発表した「人形の家」二訳の「誤訳」指摘を行った。要するにどちらも重訳なため訳し違うのだと云うことをほのめかす記事であった。それに対する反論として取りあえず前者が書かれ、それが紛失した(と思われる)時紛失の経緯と共にやや詳しく書き直されたのが後者である。ここには後年に至るまで変わらなかった彼の翻訳についての考え方がはっきりと見える。

訳文ノラの評と云ふのは、私のノラをドイツ文から訳したものだとし、島村抱月君のノラをイギリス文から訳したものだとして、評者自己はノルキイの原文に拠つて右の二つの訳の当否を裁判することにしてある。詰まりすばらしく高い処に地歩を占めて、私と島村君を脚下に見て、えらい事を言ふ。脚下に蠢いてゐる私や島村君は、どちらもノルキイ文を見たことがないのだから、私にしる、島村君にしる旨く訳し当ててゐたら、それは偶中である。頭から当るも当らぬもあつたものではない。
〔亡くなった原稿〕

評者はノルキイ語は知つてゐても、日本語は知らぬのである。(中略)ノルキイ語を承つて、あつとばかりに感服するわけにはいかない。(中略)どうもノルキイ語に通じてゐる評者には、

日本語に対する理解が乏しいやうに思はれてならない。（「亡く
なつた原稿」）

また、ツルゲーネフの「夢幻」の第十二、十三節を抄訳した「該
撤」(3)を、初出（『東京中新聞』）の翌年二十四年四月、雑誌『文則』
に再録するにあたって鴉外は

（前略）原文の句を悉く写出して、毫も取捨したるところな
きを以て、ツルゲニエツフが文体を知る一助ともなるべきにや
という自注めいた前書きを付して自信の程を示した。

ここで漢文家中島筑山、国文学者落合直文の評語が添えられたと
いう事実も、興味を引く。

落合直文曰く、世の翻訳文といふものを見るに、文章洪滞読
むに堪ふるものなし。ひとり鴉外君の訳文にいたりては絶妙い
ふべからざるものあり。ことにこの篇の如き、原文の句を悉く
写出して毫も取捨したるところなしといへり。その文にして猶
かくの如し。その筆力のほと実にくらやむべきかな。

また曰く、鴉外君の文をよみて最も感服に堪へざるは、国文
の法則をよく守らるることこれなり。予去夏京都にあそびしに、
人あり、森鷗外君は国文学者なりやと問ふ。予然らずと答ふ。
その人、心とけざるもののごとし。また以て同君の国文に注意
せらるるを知るに足らんか。（落合直文評語。これらの評語は
「誰それ曰く」という書き出しで書かれている。―筆者注）

要するに、日本文自体が急激に揺れ動いた此の時代、力量のある
人々の翻訳は外国文学（寧ろ世界文学と呼ぶべきかも知れない。）
の紹介である以上に、まず、欧文脈を訳すことを通じて和文の新し
い格調を確立する試み(4)であることが期待されたのであった。

鴉外自身、例えば明治二十二年に相前後して翻訳した二作品「玉
を懐いて罪あり」（原作ホフマン）「瑞西館」（原作トルストイ）を、
前者は口語体、後者はかなり硬い漢文調の、全く異なる文体で、訳
し分けて実験している。その際原作の選択規準自体が原作の特徴あ
る文体にあったと考えられるふしさえある。「簡嚴にして偉麗なる」
文章（「地震」について）、「文章は平家物語などの体をよみがへ
らしめん試みなりしを記憶す」（「女丈夫」について）など、鴉外は
訳出の対象となつた作品については多くまずその文体に言及してい
るのである。(5)

鴉外は、まず自身の文学表現を十全に行うための文体を翻訳を通
じて模索していたと考えられる。其の一例は処女作「舞姫」とそれ
を書き下ろす直前（同年一月）の訳業「ふた夜」の近親性に見るこ
とができる。

ミラノの客舎「ライヒマン」にて、美しき小園に臨める食堂
の戸を開きしその下に、年少き士官の一群まど居したり、数ふ
れば六人なり。げに小会食には格好なる数にて、今飲食をばし
はてつと見ゆ。……ふと見ればこの人家の裏側に出でたり。……
見入りたる一間の内には、背高きこしかけありて、若き娘座
したり。（「ふた夜」冒頭より）

主人公は騎兵士官の一青年で、休暇旅行でナポリに行く。代え馬を待つて停まった田舎の寒駅で、テレシナという駅長の娘とであい、二人は愛し合う。しかし青年士官はそのまま旅立つてゆく。四年後再び彼の地を訪れた彼は、テレシナは嫁にいったが生まれたばかりの赤ん坊を残して亡くなった事を知る。

この作品の筋の情緒には、「舞姫」のモチーフに共通するものがある。……鴉外は原作を、まだドイツ留学中、ライプチヒで読み、「無限之余情、無限之遺恨、乙酉八月十一日」と書き込んでいるという。

石炭をば早や積み果てつ。中等室の卓のほとりはいと静にて、熾熱燈の光の晴れがましきも徒なり。今宵は夜毎にここに集ひ来る骨牌仲間も「ホテル」に宿りて、……この狭く薄暗き巷に入り、……今この処を過ぎんとするとき、鎖したる寺門の扉に倚りて、声を呑みつつ泣くひとりの少女あるを見たり。（「舞姫」冒頭部より）

鴉外が「舞姫」執筆直前に「ふた夜」を翻訳しており、「ふた夜」翻訳によって得た雅文調の文体を以て「舞姫」を書いたというつながらは注目に値するのではないか。(6)

自らの翻訳観に従って、対応する概念がなく日本語に移植するのに無理の生じるもの、日本語にすると説明になってしまい調子を崩す恐れのあるものについては鴉外はこれをどしどし省筆した。

官位官等は風俗の違いにも増して異国人にははかりにくい。(7) 鴉外は例えば「玉を抱いて罪あり」の訳出に当たっては、冒頭に丸々

一段あった、女主人公の宮廷内の位置の説明を、そっくり抜いた。フランスの蔵相コルベールの知遇を得てルイ十四世の宮廷に親しく出入りしたドイツ人ワーゲンザイルのメモワールから材を得た半実録であることがこのホフマン作品の眼目であったことを、鴉外は知っていた（『観潮楼偶記』）のであるから、鴉外自身に女主人公の閱歴が退屈だった筈はない。日本の読者に必要がないと判断したので抜いたことは明らかである。

かくして鴉外の訳文は常に国文学者をもうならせる、こなれた日本文であった。目に見えるところでは○（かぎっこ）等の借屈は見られない。

二 重訳との分水嶺——内田魯庵訳「罪と罰」——

「罪と罰」の翻訳が極めて珍しい形（二葉亭四迷こと長谷川辰之助との協同作業）で進められたことは知られ、それについては魯庵自身の次のはしがきが端的に物語る。全部で五項あるが次にその二項を引用する。

一余は魯文を解せざるを以て千八百八十六年版の英訳本（ヴ井ゼツテリイ社印行）より之を重訳す。疑はしき処は惣て友人長谷川辰之助氏に就て之を正しぬ。本書が幸に英訳本の誤謬を免れし処多かるは一に是れ氏の力に關はるもの也

（二項省略）

一本書を擇するに当て第一に恥づるは余が魯文に言なる一事にして識者の嗤笑も亦ココに在らむ。然れども其嗤笑を顧みず

して是を重訳するもの豈理由なしとせんや。幸に友人の魯文に通曉する者あつて其訳本の誤あるを正し足らざるを補ふて聊か其罪を軽ふするを得たるは余が実に感謝する処也。庶幾くは江湖の諸君子も「重訳」の言下に之を斥罵する事なからむ。

つまり魯庵は右のように自身の翻訳の底本を明記し、重訳であることをわざわざことわっている。この時代極めて例外的なことだ。

魯庵は十八才の頃から親戚にあたる井上勤の翻訳助手(下訳)をして英語には慣れ、自信もあつた。翌年十九才の歳には東京専門学校英語本科三年に編入される実力をもつていた。ゲーテ『狐の裁判』(明治十七年、絵入自由出版社)、パーテル『英仏独和近世会話篇』(明治二十三年、開新堂書店)ほか若年より幾冊もの翻訳を公にしたのみならず翻訳雑誌『欧米大家文学之花』(明治二十年発刊)の編集を創刊以来任されており、コンスタントに訳業を継続していた。「生活の資のため」とはいいい条かなり大きなものを含め翻訳点数の多さは当時の第一人者のひとりといつてよい。

ところでこのうちゲーテは重訳だろう。魯庵と雖も二葉亭と露西亜ものとは対峙するまでは必ずしも重訳問題に意識的でなかつたことがわかる。

明治二十二年『國民の友』が行つた愛読書アンケート「書目十種」に答え、魯庵は英語通の教養人に相応しく徒然草などの古典とディケンズなど英文学(英文)とを半々に挙げたがその他では唯一「ツルゲーネフのあひびき及めぐりあひ」をあげており、まだ見ぬ二葉亭の訳業から強い印象を受けていたらしい。

よく知られるように、同明治二十二年、嵯峨の屋御室(二葉亭と

外国語学校露語科の同窓)が身ぶりを交えて「もぐもぐ」語つた「罪と罰」の梗概をきき興味を持った尾崎紅葉が魯庵にそれを伝え、魯庵は丸善に走つた。そして日本に数冊入つたヴィゼツテリ版『罪と罰』を手にしたのである。(コンスタンス・ガーネット⁽⁸⁾による、所謂ガーネット版が普及する以前日本で手に入るロシア文学の英訳本としてはヴィゼツテリ社版がスタンダードであつたといえる。高安月郊は明治二十六年ヴィゼツテリ版でInjury and Insult(「虐げられた人々」)を読み「損害と侮辱」として『同志社文学』に連載(中絶)した。「罪と罰」を読んだとき魯庵は二十二才、「同時に私は二葉亭を憶出した。岩本撫象が二葉亭は哲学者であると云つたのを奇異な感じを以つて聞いてゐたが、ドストエフスキイの如き偉大な作家を産んだ露国の文学に造詣する二葉亭は如何なる人であらうと揣摩せずにはゐられなかつた。」と後年語っている。

魯庵が二葉亭に直接の面識を得るのは旅先でその「罪と罰」を読み通した直後のことである。机上に名刺を見出し、自分の不在中二葉亭が尋ねてきたことを知つた魯庵は、すぐさま(帰京の翌々日)二葉亭をおとなう。「恰も酸を懐ふて梅実を見る如く」(魯庵回想)に時を得た出会いであつた。一方、知られているように、二葉亭はまだ外語に在学中の「修業時代に其の作『罪と罰』を徹夜で読み通したことがあつて、その面白味を露人の教師に話した」。魯庵が同書からうけた感動をぶつけたとき二葉亭の中にも、それに十分応え得るモメントはあつたのである。

『罪と罰』の翻訳を二葉亭に声色まぢりて聞かせながら、父は夢中になつて手真似や表情で感激し、夜の更けるのも知らなかつた。さうして遂には二葉亭も興奮して、二人はラスコーリニコフやナタ

ーシャの声色のかけ声が始めるといふ騒ぎは父がいつも懐かしげに語るところであった、とは魯庵の長男殿氏の語るところであった。

My Godにあたる、間投詞Boje moiが、魯庵の初訳では「ボジュ、モア」とフランス語読みされ、二葉亭の教示を受けて改版の際「ポージュ、モイ」というロシア語読みに直されたなどはご愛敬であるが、魯庵は英訳なら自由に読めたであろうのにその向こうにあるロシア語を二葉亭を通じて探究していく。それは徹底したものであった。「三度草稿を原作に比照し、試刷を更ふる事凡そ七度」したと後年語る。

具体的にどのような教示があったかは、まず訳文に左の如く明らかな反映をみることができる。第一の引用は有名な冒頭部である。

七月上旬或蒸暑き晩方の事。S…「ペレウーロク」(横町)の五階造りの家の、道具附の小坐敷から一少年が突進して、狐疑逡巡の体でK橋の方へのツそり出掛けた。

此家に属する番人(魯西亜語「ドボールニク」)は三四人も有ツたが

或る時ソーネチカ(ソーニヤの事也)が不意に「バーヌース」(白毛織の上衣)を着て出掛ける所を見た。

大方は赤と青の「シヤツ」の上に無袖の「スモツク、フロツク」(粗布で裁ちし外套)を着て、勿論酔泥れてゐたが、手に、「バラライカ」(三味線の類)を持ってどなり散らしてゐた。

是でも僕は身分ある者で「ティツリヤールヌイ、ソベットニク」(九等属?) マルメラードフと申します。……

(一)で割り注を入れるのは、「ちとくだくだしいが」と断りつつ二葉亭が採った方法であったが、魯庵も非常に生真面目に原語の発音及び其の説明を紙面に割り込ませた。其の結果、文体については「原意を損せざらむとするに勉めたりといへども……中々に此一大名篇を国字に移すの任にあらねば、」(巻一 例言)「拙」なものになつてしまつた、と自分では言っている。

又ふたりのやりとりはのちの「復活」(原作トルストイ、明治三十八年四月―十二月魯庵訳載)の翻訳に伴う往復書簡からも類推することができる。「復活」関係の二葉亭書簡は現存四十一通、書簡番号189(明治三十八年三月三十日付)から235(明治三十八年十月一日以降日付なし)まで、全集にして162―228頁を占める。ほぼ毎日詳細な長文が往復し、しばしば二葉亭による図解説明が試みられている。また二葉亭の書簡に「昨夜も晩く帰宅今朝も朝来用事ありて御返事遅なはり申候」「帰宅後尚ほもう一返読み返したところ(中略)が分らぬ」といった言葉散見、実際の緊密な往来を証拠立てる。

明治二十五年十一月に『罪と罰』「巻の一」が刊行されるに先だつては五月二十七日付『国会新聞』に二十三階堂主人という署名で次のようなタイミニングの良い先触れが行われた。

罪書は其生涯の作として今露西亞三大偉観の内に算らる、一

度世に出るや欧州諸国争ふて是を転訳し（中略）近来我国是を伝へて邦語に訳し頃日世に出さんとするものありと伝へ聞く其訳者果して何者ぞ

二十三階堂主人こと松原岩五郎は『最暗黒の東京』等て有名だが、当時『國民の友』『國民新聞』『毎日新聞』などによって論陣を張っていた。二葉亭の歳下の友人であり、二葉亭が人生探訪と称する、身を糞しての貧民街探訪の手引きを行ったことは知られている。言ってみればこれは内々の応援であり、翻訳が順調に進んでいたことが窺われる。

しかし、魯庵が周到に底本の校合に念を入れ、かつその経緯を讀者に誠実に公開すればするほど、讀者（批評）の側も翻訳という営為そのものの課程にこだわる結果となり、極めて異例（と思われる）細かい翻訳論的批評が、あらわれた。

魯庵自身によって「巻の二」巻末には「前巻批評」として、「巻の一」刊行によってもたらされた反響のうち十八種が全文収録されている。坪内雄蔵（坪内逍遙）、饗庭篁村、残花（戸川残花）、夕陽鴉外楼主人、高橋五郎、愛山生（山路愛山）、巖本善治、學海居士（依田學海）、思軒居士（森田思軒）、自助生、透谷子（北村透谷）、雲峰生、てつぷ、南海散史、十八公子（松居松葉）。当代の、錚々たる翻訳家達が並ぶ。

本稿では翻訳論にわたる（訳文と原文の照応を検証した）ものだけをとり上げよう。(9)

高橋五郎（『國民の友』百七十三号）は独訳（所謂モーゼル版）との比較を行っており、独訳にない語や段落に疑問を呈した。又、

先に引用した冒頭部分を取り上げ、次のように言っている。

ペレウーロクてふ魯語は何のために入れたるや、何故に直ちに横町とは書かざりしや、（中略）此文はペレウーロクにて徒に讀者を煩らはせり、

十八公子（松居松葉）（『城南評論』十一号）はそれに対する弁護を買って出る形で主に英訳との比較から発言し高橋五郎の難詰をかわした上で、次のように英訳本にない箇所を幾つか指摘している。

三頁の表『コロフ王の事を。で、とうとう先日中から……』より以下二三行はこれ英訳になきところ、

つづいて南海散史（北川貞行）（『うらにしき』四、五号）は「吾人も亦、ココに露西亞の原書を以て、聊か比較的に批評を試むる所あらんとす」と述べた。『裏錦』は露西亞正教会の女性信徒の会報で、『正教新報』がどちらかというと教会の教勢などを中心とした公の機関誌としての色合いが濃かったのに対し、文学文化面の読み物中心であった。日本ロシア正教会は必要上信者にロシア語教育を進めたし本国ロシアへの留学生を次々派遣した。明治十五年第一回一名、以後不定期に十八名が明治期に留学している。彼らは従って文学者ではなかったが二葉亭を論外に置くなら当時の日本人としては破格のロシア語力を持った集団であり、いきおい、ことロシアものに関しては発言権を強めていたと言える。(10)彼は魯庵が（原文に従って英訳の）「足らざるを補へる点あるも、遺漏する所、蓋亦な

きにしもあらず。」と言って自家の蔵書を丹念に対照し

而して又、「此家の主婦は」の下に、原作には、尚八字あり。

原文八語(У которой он начал эту каморку с обедом и прислугой

賄い付きサービス付きで部屋を借りている、の意)を拾っている。

しかし、何れの評者も、全体としては検証の結果、翻訳に練達した魯庵が、凝り性の二葉亭と協力して仕上げた此の訳業の綿密さには舌を巻いたという趣である。

先に引いた謙遜に過ぎるような自序は、ある意味では、当代最高のロシア学者二葉亭の全面的且つ全力の応援を得た魯庵の、どこからの批判にも十分堪えうるぞという、深い自信の現れであるようにもうけとれる。

後に改訳を行った折も魯庵は次のように言った。

此英訳は不完全であるが、幸ひに旧訳当時故二葉亭四迷氏に

由て原本と対比較勘した書入本及びノートの残存するものを基礎として若干補修した箇所がある。夫故に英訳に由つたのであるが、必ずしも一々英訳通りでは無い。(後略)

そういういきかたを厳密に貫いたこの魯庵の翻訳は成功であった。(1)藤村の「春」の中で北村透谷をモデルにした主人公青木の口にする有名な次の科白も、ロシア語原文から補われた部分のひとつなのである。

「俺かい。」と青木は不安な眼付をして、「俺は考へて居たサ。」

(中略)「内田さんが訳した『罪と罰』の中にも有るよ、銭取りにも出掛けないで一体何を為て居る、と下宿屋の婢に聞かれた時、考へることを為て居る、と彼の主人公が言ふところが有る。彼様いふことを既に言つて居る人が有るかと思ふと驚くよ。考へることを為て居る——丁度俺のは彼(あれ)なんだね。」(「春」)

魯庵は晩年に至るまで二葉亭を追慕し、その名を口にするにさえ情が溢れたと伝えられる。しかし当然ながらそれは重訳を自らに決定的に封じる結果となった。

この作品を読んで雷に打たれたような衝撃(恰も曠野で落雷に会ふて眼眩めき耳聾ひたる如き、今までに曾て覚えなない甚深の感動)を受け、心血を注いでの翻訳にかかった(嵯峨の屋御室はもとより紅葉も二葉亭も結局翻訳に向かわなかった)魯庵であるのに、畏友二葉亭が亡くなると、独力で訳筆を執ることがもはやできなかつた。

魯庵は丸善の囑託として『學燈』の編集にその碩学をいかすことになる。「卷之三」はかくてあらわれず、魯庵によって「罪と罰」を知った読書人は英訳本でよみついた。(12)

ドストエフスキの全集が、昇曙夢(13)門下の外大ロシア語専攻第一期の学生達による野心的な企画として実現されるのが大正十三年、若き中村白葉の「罪と罰」は大正四年に新潮文庫の七分冊で刊行された。

注

- (1) 明治四十四年鴉外は博文館読者投票翻訳家一位に選ばれた。
- (2) 「オーストリア 奥太利」と鴉外が分類した中に入っているデイモスはロシア人であった。判定のつけにくい例は多かったと思われる。
- (3) ケエザルの写音。此の漢字をシーザーにあてた前例は、坪内逍遙記「しじごるまんだん 該撤奇談 自由太刀余波銳鋒」にみられる。
- (4) 明治中葉まですなわち西洋文翻訳の草創期、意識や翻案でない、原作に忠実についてゆく訳は周密体（稠密体）とよばれ、ひとつのスタイルとして扱われた。普通には、日本語としてなじまない内容や文の部分は捨て、文調上必要な文言は補った（その度合いが大きい翻訳は柳田泉氏によって豪傑訳と名づけられている）。
- (5) 明治二三年一月発表の「馬鹿な男」（原作ツルゲーネフ）は口語体をもちいた最後の（鴉外は明治二十二年「玉を懐いて罪あり」で試み始めた口語文体を、わずか五編でいったん放棄した。）翻訳作品である。
- これは昨年なくなつた魯西亜の小説家トウルヂエニエツフが「ヴイエイトニツク、イエフロビー」新聞に出して非常な喝采を博した所謂（中略）二葉亭四迷氏がお箱の種本、兎ても及びもないことですが人真似に訳して見ました
- と前書きにしるしており、おそらく材料の採択のみならず、文体に於ても、鴉外が二葉亭の成果（「あひびき」「めぐりあひ」）を強く意識していたことが窺われる。
- (6) そういう意味では二葉亭が「浮雲」を書く文体を作るため翻訳したのがツルゲーネフ、就中「あひびき」「めぐりあひ」であったことも「浮雲」を未完で投げ出さねばならなかった一因かも知れない。例えば「罪と罰」だったとしたら、どうだったであろうか。
- (7) 芥川がゴーゴリの「外套」を机上に常に拡げて参照しつつ「芋粥」を書いたことは有名であるが、九等官を五位としている。その為原作の「木っ端役人」が貧乏（ではあるが）貴族の設定に代わっている。
- (8) コンスタンスは、大英博物館員の息子エドワード・ガーネットに嫁いで以来、イギリスに亡命して同博物館の常連になったステブニヤークほかのロシア人と直接付き合う機会に恵まれ、やがてロシア文学翻訳にむかう。
- 因みにステブニヤークの著「地底のロシア」は、早くも明治十七年『虚無党実伝記 鬼啾啾』（宮崎夢柳訳、自由燈）として日本に翻訳紹介されている。
- (9) 虚無党の名で伝聞されたロシアのアナーキストに対する、恐怖を交えた関心から明治期露西亜文学翻訳は始まった。二葉亭にも「あひびき」「めぐりあひ」に先だつてツルゲーネフ「父と子」の翻訳の試みがあり、『虚無党形氣』と題されていたということは知られる。
- (10) この中で北村透谷の批評が、日本人のドストエフスキー理解の最も深いものとされ、例えば依田學海の評（「誰か小説は勸懲を主眼とせずといふや。」）と比較されるが本稿では触れない。
- (11) 瀬沼夏葉はチェーホフの、小西増太郎はトルストイの、初期の優れた翻訳家として文学史にも名を残している。
- (12) 戸川残花が樋口一葉に本を貸し、「なによりも悦ばるるは和漢の書、こゝには翻訳小説なりき。不知庵君の罪と罰をかしまひらせし時には、いと悦ばれ、後の日に來られて、繰り返し繰り返し数度よまれしと云はれぬ」と回想。
- 赤旗事件（明治四十一年）で入獄した荒畑寒村に菅野スガが送ったのがヴィゼッテリ版「罪と罰」

(13)

ロシア正教の信者としてニコライでロシア語を学び、のち翻訳家として二葉亭七喜後のロシア文学翻訳紹介の第一人者としての位置を長く保った。明治四十二年には匿名で『無名通信』誌に拠り上田敏のアンドレーエフ翻訳の「出鱈目」を攻撃。こうした、原語を知る側からの締め出しによっても、重訳が重訳という理由で成り立たなくなる趨勢がはっきりしてゆく。時代と共に翻訳における翻訳者の「文章力」の地位は相対的に後退したのである。

翻訳における原語主義、即ち翻訳は重訳でなく必ず直接訳であるべきであり、また、訳文が示された後も原文との照応によって部分毎に「誤訳指摘」がなされ得る、とする考え方はそう伝統的なものではなく、近代に現れた、日本人の一種の潔癖と考えられる。(こうした傾向の弊害として、翻訳の文学性が低くなりつつあると述べたものに、例えば山本夏彦『私の岩波物語』がある。)

補注「田楽豆腐」(全集10)―鷗外が誤訳批判を受けていた様子が書かれた小品。

補注 日露戦争後島村抱月はロシア文学研究の必要を唱えて水明会という研究会をつくり(明治三十九年)そこに先生として昇曙夢を招いた。

補注 中村元『東洋人の思维方法』には、中国において、仏典が漢訳された時代、しばしば原典(底本)は捨てられたことが書かれている。翻訳が、新しい概念の導入であり、必然的に時代に傑出した僧によってのみ成されたことにもよるが、以降の仏教研究はその漢訳をもとに行われ、漢字(サンスクリット音へのあて字)解釈などから中国独自の仏教が生起する誘因となった。

参考文献

- 1 二葉亭四迷一九九一『二葉亭四迷全集』第七卷、筑摩書房
- 2 木下豊房一九九三『近代日本文学とドストエフスキー―夢と自意識のドラマ―』、成文社
- 3 小堀桂一郎一九八二『森鷗外―文業解題(翻訳篇)』、岩波書店
- 4 松居竜五、小山騰、牧田健史一九九六講談社選書メチエ81『達人たちの大英博物館』、講談社
- 5 松本健二一九七五『ドストエフスキーと日本人』、朝日新聞社
- 6 森林太郎一九七一『鷗外全集』第一卷、岩波書店
- 7 一九七一『鷗外全集』第四卷、
- 8 一九七一『鷗外全集』第十卷、
- 9 一九七四『鷗外全集』第二十七卷、
- 10 長縄光男『遺露神学生列伝』、安井亮平編一九八七『共同研究 日本とロシア』
- 11 長島要二一九九三『森鷗外の翻訳文学』、至文堂
- 12 中村喜和『瀬沼夏葉 その生涯と業績』、一九七二橋大学『人文科学研究』14
- 13 中村光夫一九七一『中村光夫全集』第一卷、筑摩書房
- 14 野村喬 一九九四『内田魯庵傳』、リブポート
- 15 野村喬編一九八四『内田魯庵全集』第十二卷、ゆまに書房
- 16 『鷗外全集 月報』

Translation of Russian Literature in Meiji (3)

Yuri Kato

Mori Ogai and Uchida Roan were considered to be the best translators of the foreign literature in Meiji. The author compared the two, trying to follow the principles in their translation.

Ogai wanted to introduce the latest tendencies of the world literature to Japanese intellectuals and translated novels and other writings from German newspapers and journals. He didn't mind whether they were originally written in German or not.

In early Meiji, translation was considered as one of the best ways to reconstruct and improve Japanese writing. Ogai experimented various styles in order to find a suitable style for his own novel. The author paid attention to the resemblance of styles between his translation and his original novel: "Futayo ("Zwei Nachte") and "Mai-hime".

When Roan translated "Crime And Punishment" (Dostoevskij) from English, Futabatei Shimei greatly helped this translation with his knowledge of Russian language and literature. Roan, appreciating his advice, rectified shortages in the English text as much as possible.

As a result of this successful translation, people became aware of the superiority of the translation directly from the original, while Roan no longer could translate Russian literature after the death of Futabatei.

Key Words: double-translation, "Crime And Punishment", Uchida Roan, Mori Ogai, translator